

国 語 科

主任:大塚 仁史

(1)今年度の目標

- ① 論理的な読解能力の向上
- ② 古典読解力の向上
- ③ 読書指導の強化

(2)主な取り組みの計画

- ① 論理的な読解力を向上させるための指導を工夫する。
 - ア 授業で論理的な文章を教材として積極的に使用する。
 - イ 評論文を要約させることを繰り返すことにより、論理的な思考を養成する。
 - ウ 斯文土曜塾において、学年を追って難解な評論の記述問題に取り組ませる。
- ② 古典読解力を向上させる。
 - ア 基礎力テストを利用し、動詞→形容詞・形容動詞→助動詞→助詞→敬語という段階を踏んで読解させる。
 - イ 日本語における文末表現(助詞・助動詞・補助動詞等)の微妙な差異に気づかせ、現代語訳を注意深く行うことの重要性に気づかせる。
 - ウ 学力テストを用いて、より多くの古典に触れさせる。
 - エ 生徒に予習をして授業に臨むようにうながす。
- ③ 生徒が書物に触れる機会を増やす。
 - ア 図書館利用を促す。
 - イ 読書の記録や読書感想文を利用し、長期休業中にも図書に触れる機会を増やす。

(3)授業アンケートの結果と分析

授業の進度は、速いという意見が多いことも予想されたが、適切であると答えた生徒が多く(1年現文 87.8%古典 80.2%、2年現文 90.2%、古典 85.1%)、全体的に授業内容については、概ね良い評価を受けている。特に、「授業の理解度」という設問に対しては、多くの生徒(1年現文 94.5%、古典 93.4%、2年現文 90.9%、古典 96.3%)、から「よくわかる」「だいたいわかる」の肯定的な評価を受けている。……[1]

授業に対する希望では、どの学年も「興味深い」「楽しい」「今のままでよい」が多かった(1年現文88.5%、古典87.9%、2年現文86.9%、古典85.4%)。……[2]

1年古典の「予習」についても、昨年度や1学期末に比べ、2学期末の調査で増加している。1年生はオリエンテーションなどを通して予習・復習の方法を説明しているが、予習を「何もしない」者が 13.9%まで減り、「わからない単語を、辞書を引いて調べる」「自力で現代語訳を試みる」者は 33.7%まで増加した。更に「文法事項を調べる」予習を行っている者が 15.8%いる。1年生という学習段階からすれば、自力での現代語訳は未だ難度が高いため、学年進行により「自力で現代語訳を試みる」層の育成が期待できる。……[3]

また、「授業の理解度」との関連性を見ると、「わからない単語を、辞書を引いて調べる」「自力で現代語訳を試みる」「文法事項を調べる」層では、授業が「よくわかる」「だいたいわかる」と答えた者が87.3%、「努力した結果徐々に成績が伸びてきた」「努力に応じた成績は出ている」者が91.5%存在する。来年度(第2学年)においても、「予習」指導を継続することが望ましいと考える。……[4]

2年古典の「予習」については、昨年度や1学期末に比べ、2学期末の調査結果では増加している。特に「何もしない」者が11.6%まで減り、「わからない単語を、辞書を引いて調べる」「自力で現代語訳を試みる」者は60.8%まで増加した。……[5]

また、「予習」と「授業の理解度」「学習成績」の関連性を見ると、「わからない単語を、辞書を引いて調べる」「自力で現代語訳を試みる」「文法事項を調べる」層では、授業が「よくわかる」「だいたいわかる」と答えた者が94.2%、成績が「努力した結果徐々に成績が伸びてきた」「努力に応じた成績は出ている」者が92.6%存在する。「予習」の必要性・有効性については理解されていると考える。……[6]

古典においては古文では古典文法、漢文においては句法が重要である。指導手段として基礎力テストを行っている。全員が合格するまで粘り強い指導を貫くことで、1年で92.0%、2年で90.9%の生徒が、テストを機会に真面目に取り組んだと答えている。また、3年生の自由記述(1・2年生に伝えたいこと)では、「基礎力テストの内容を1・2年の間にしておくことに意味がある。受験直前になって詰め込んで効果があるものではなく、基礎力をつけた上で、自力で古典に取り組むことで力が上がる」と記述した者が複数いた。…[7]

3年生の自由記述では、他に「学テの範囲のチャートや問題集はしっかりやる。自力で読んだ古文・漢文は、古典を読む力を底上げする」という記述も目に付いた。……[8]

読書冊数においては、内容の問題もあるので、簡単に数値化して済ますことはできないが、1学期に1年生が平均2.41冊、2年生が2.59冊であったものが、2学期には1年生が2.93冊、2年生が2.88冊と増加した。……[9]

(4)今年度の成果と課題

今年度は現代文において論理的文章にやや比重を置いた授業計画を立てたが、生徒にはおおむね好評であった(アンケート[1][2])。校外模試における現代文の偏差値も上昇傾向にあり、この方針は来年度も継続してよいと思われる。

古典では年度当初に学力テストや基礎力テストの範囲を周知し、計画的に文法事項をおさえつつ読解に生かす授業計画を立てたが、生徒にはおおむね好評であった(アンケート[1][2][7])。また、予習の重要性についても、浸透しつつある(アンケート[3][4][5][6])。

また、古典では基礎力テストや学力テストを機会とした学習により、古典読解力を身につけていることがうかがわれる(アンケート[7][8])。

読書指導に関しては、夏休みに「読書感想文」を、また、春・夏・冬の長期休業中には「読書の記録」を課題に設定することで、生徒に読書の機会を持たせている。また、授業でも折に触れ、課題探求型の授業を実施し、その際図書室を利用した。教科書で学習した評論を、図書室で購入してもらうなど、図書室とも連携して読書指導を行っている。さらに、昼の読書週間の実施・蔵書のデータベース化による検索効率化など、教育研究部と提携した取り組みもあり、読書に親しむ層のさらなる増加が期待できる(アンケート[9])。

教員間で、お互いの取り組みや生徒の現状について情報交換を図り、より有効な指導方法を工夫することも必要である。そのための機会として相互授業参観週間は大いに有効であった(学校評価教員アンケートより)。来年度も継続が望まれる。